あまり知られていないのではないでしょうか。一昨年の「武田信玄」の放送を見て知った人も多いことと思います。私はまず特徴のある言葉やアクセントを見つけて真似してみることから始めました。「やせったい、やぶせったい、しゃらうるさい、だっちもない、おまんら、わけーし……」等々、威勢のいい言葉が次々と耳に入ってきます。語気の強さと歯切れのよさ、そして独特のアクセントとまくしたてるようなテンポが合わさって、けんか腰のようにさえ思え、こんなことを言うとしかられるかもしれませんが、初めの頃は、甲府の人はとてもきつくてけんか早く、私のような〝わたりもん〟にとってはつきあいにくい人達ではないかなという心配をしたものです。でもそれぞれの言葉の使い方やニュアンスがわかってきて、実際に自分でも使ってみると、甲州弁はとても味わいのある言葉であることに気がつきます。そしておつきあいをしてみると、甲府の人達は、親切でめんどうみの良いあたたかい人が多いように思われます。

近頃では私も、「いいじゃん・いいさよ」といったような言葉が無意識のうちに出るようになってきました。そんな時、私も少しは甲府の人になってきたかなとうれしい思いがします。あと何年かたってふと気づくとすっかり甲州弁になっているかもしれません。そんな日が来るのをとても楽しみにしています。

とりとめのないことを書いてしまいましたが、私はこの街に住めるようになったことに喜びを感じています。これからも甲府の自然や言葉、そして人々との交流を大切にしてゆきたいと思っています。

（市史編さん事務局）

山梨の民話にあらわれる動物

宮　澤　富美恵

狩猟採集経済の時代には人間にとって動物は重大な関心の対象であり、日常生活の中で話題にのぼることも多かったかもしれない。現代に至るまでの長い時間、動物と人間は様々な関係を結んできた。民話（昔話）の中にはその関わりの一端を示すものが多く含まれている。山梨に伝わる民話の中には、山国とあってか動物の登場するものも多いという。

ここでは、一九二二年から一九八〇年の間に直接採集、公表された昔話資料を収載した『日本昔話通観』第一二巻「山梨・長野」（稲田浩二・小沢俊夫編、内容は「むかし語り」「笑い話」「動物昔話」の三つに分けられている）から、「動物昔話」に特にこだわらずに、登場する動物達の個性（といってもそれは語り手＝人間の動物観が強く反映したものだが）をいくつかみてみたい。

狼（山犬）

牧畜民にとっては凶悪な獣の代表である狼も、日本では恐怖の対象であると同時に害獣から田畑を護る〈カミ〉、「大口真神」として祀られ、関東・中部を中心に広がる三峯講では狼が眷属として現在でも信仰の対象になっている。秋山村に伝わる「古屋

の漏」（『通観』では古屋のもおりどん―騒動型として分類されている）で、「狐や狼様が食いにくるだってね、馬を。」という具合に語り手が狼だけに敬称を付け他の動物と別扱いにしていることからも、狼は単なる恐怖の対象ではなかったことがうかがえる。

狼が人間を襲うという話や人間のあとをどこまでもついてきて人間が転んだりするとすかさず食べてしまう〝送り狼〟の話ももちろんあるが、人間を救う、恩に報いる、といった話も目立つ。喉にささった小骨を取り除いてもらったお礼にその人間を危険から救う、というのはその典型であろう。

猫

猫にまつわる話は意外に多い。一方、猫と同じく人間にとって最も身近な動物である犬が、全国的な傾向であるのかはわからないが猫ほど登場しないのは、犬には想像力を働かせる余地があまりないからではなかろうか。犬の話が〝義犬〟〝忠犬〟といったパターンに偏りがちであるのに対し、猫の方は〝化猫〟物、報恩譚、動物由来（なぜ猫は～であるか、の類）等豊富である。

〝化猫〟物といっても、夜中に仲間で集まり踊る猫だとか、狩人の銃弾を茶釜のふたを盾代わりによける猫などどこか憎めないキャラクターを持っている。報恩譚で有名なものは「猫壇家」であろう。竜王町の慈照寺がその舞台で、貧乏な寺を飼い猫がその「魔力」で再興させる話である（同様の筋の話は長野県でも上水内郡小川村を中心に伝承されている）。また、長年世話になったお礼に飼い主の前で忠臣蔵を演じたというものもある。

狸（貉）と狐

貉の登場するものでは『甲府市史別編Ⅰ』も触れている「建長寺の貉和尚」（『通観』では和尚はむじなというタイトルが付されている）がよく知られているが、この話は地域により狸和尚に変わって東京、神奈川、静岡、埼玉等でも見られる。

狸（貉）と狐は人を化かす動物の代表のように思われ、『通観』にも「笑い話」をはじめ狐狸が化かす話は多数収録されているが、狐に比べ狸はいま一つ間の抜けた役割を与えられることが多い。狸のいたずらにはカチカチ山のように随分残虐なものもあるが、大抵あっさりばれてしまったり狸汁にされてしまったりと滑稽さといくらかの物悲しさがある。狸（貉）と狐が登場する話でも、一緒に手に入れた伝馬の弁当を狐に大部分だまし取られたり（拾い物分配―狐の文読み）、ついには苦心してつくった巣も奪われ殺されてしまう（狐とむじな）。狐の方が一枚上手のようだ。

この他にも猿、蛇、熊、馬、鳥類、昆虫類等々多くの動物達が民話の世界を彩っている。人間にとって親しい存在でありつつも、完全に飼い馴らすことのできない野性・神秘性を有するこれらの動物達は、〈カミ〉としてあるいは神使として祀られ共同体や個人に富をもたらす一方、手に負えないいたずら者であったり、時として人の命すら奪う恐ろしい魔物として畏れられるという両義的存在であった。

狼はすでに絶滅し、狐や狸もすみかを追われて人間に保護される存在となった現在、山々に囲まれたこの山梨が動物にとっても人にとっても幸福な環境でありつづけることを願うのみである。

また、民話が口承という性格を持つ以上、甲府市においても一日も早く体系的に収集・整理がなされることを望む。

（市史編さん事務局）